The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	語り手としてのカジモト像 : E・ケジラハビ Kichwamaji の主人公カジモトをとらえなおす
Author(s)	小野田, 風子
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 2015, 26, p. 1-19
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72968
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

語り手としてのカジモト像
― E・ケジラハビ *Kichwamaji* の主人公カジモトをとらえなおす ―

小野田　風子

0. はじめに

タンザニア出身のスワヒリ文学作家ユーフレイズ・ケジラハビの二作目の小説である *Kichwamaji*（初版 1974 年）の主人公カジモト（Kazimoto）[1]は、アンチ・ヒーローとして幾度も研究の対象となってきた。先行研究においてカジモトは、「西洋的な文化にあまりに影響された結果、もはや伝統的な価値を認識することができなくなった若いアフリカ人」（Bertoncini 2009: 96）、あるいは、「一方で大学教育と現代的な考え、一方でキリスト教と文化的伝統に挟まれ、その間で引き裂かれる若いタンザニア人」（Diegner 2002: 62）などと解釈されてきた。これらの解釈に共通しているのは、作中に「都市と村」、あるいは「文化的伝統と現代的教育」の対立を見出し、カジモトという個人の問題を「アフリカのインテリ」というレベルにまで一般化するという方法である。

本論の目的は、このような対立構造や定式化された解釈を見なおし、一般化されてきたカジモトを語り手として相対化することで、新たなカジモト像を提示することである。また、これまで曖昧のまま放置されてきた本作のタイトルである“kichwamaji”という語を、カジモトという人物の個性に深く関わる語ととらえなおし、その本文での意味や役割を検討する。

1. 作品の概要

1.1 作者の紹介

ユーフレイズ・ケジラハビは 1944 年に当時のイギリス領タンガニーカ、現在のタンザニアに位置するヴィクトリア湖のウケレウェ島で生まれた。初等・中等教育をウケレウェで終えた後、1976 年ダルエスサラーム大学で修士号を取得する。その後 1985 年、アメリカのウィスコンシン大学で博士号を取得、教職に入ったのち、現在はボツ

[1] スワヒリ語圏の名前であり、仕事熱心な人という意味をもつ。

ワナ大学で教鞭を取っている。

Kichwamaji はケジラハビの二作目の小説であり、30 歳の時の作品である。2014 年現在までのケジラハビの小説には、本作のほかに、*Rosa Mistika*『ロサ・ミスティカ』（1971）、*Dunia Uwanja wa Fujo*『混沌たる世界』（1975）、*Gamba la Nyoka*『蛇皮』（1979）、*Nagona*『ナゴナ』（1990）、*Mzingile*『迷宮』（1991）がある。詩集には、*Kichomi*『激痛』（1974）、*Karibu Ndani*『ようこそ中へ』（1988）、*Dhifa*『祝宴』（2008）があり、戯曲に、 *Kaptula la Marx*『マルクスの半ズボン』（1999）がある。

1.2. 作品のあらすじ

主人公であり語り手のカジモトには、ともに湖畔の村で育ったマナセという幼なじみがいたが、その関係は友好と敵対を繰り返していた。カジモトがダルエスサラーム大学の学生となった頃、マナセは出世して地方長官となっていた。ある日二人は再会するが、カジモトはかつて妹のルキアをマナセが妊娠させたことを許せないでいた。大学の長期休暇でカジモトは帰郷する。しかしそこでルキアが流産のために死んでしまい、さらにその衝撃で母親も命を絶ってしまったことで、カジモトはマナセへの復讐を誓う。そしてマナセの姉のサビナを、遊んでから捨てる目的で誘惑するが、図らずも恋に落ちてしまう。さて、マナセはかつて性的関係を持った女性からある病をうつされており、その病が原因で妻のサリマとの間に頭の大きな子が生まれてきた。カジモトとサビナは結婚し子どもができるが、サビナも流産してしまう。その後カジモトは、自分も同じ女性からその病をうつされていたことを知り、妻のサビナに罵られた後、自殺するに至る。この主題の他にも、作中にはさまざまなエピソードが含まれている。カジモトが故郷の村での複雑な愛憎劇や、カジモト自身の自由奔放な女性関係、そのために悪影響を与えてしまった歳の近い弟カリアの悲惨な死、実家が原因不明の嫌がらせを受ける呪術騒動などである。

2. “kichwamaji” の意味

作品のタイトルである“kichwamaji”という語が作中に登場するのはただの一度だけである。カジモトが自殺する直前に、妻のサビナが彼を“kichwamaji”と呼んで罵るのである（Kezikahabi 2008: 195）。タイトルであり、主人公の自殺の直前に登場するこの語が、本作にとって重要な語であることは明らかである。しかしこの語は作中に一度し

か現れないだけではなく、文脈からその意味を特定することも困難となっている。本章では、一義的に解釈することのできないこの語の本文における意味を考察する。

2.1 “kichwamaji” の多義性 —病名か罵倒語か—

“kichwamaji”という語が唯一登場する場面を詳しく見てみよう。最後から二番目の章である 13 章で、流産という不幸から数か月が経ったある日、カジモトと妻のサビナはマナセの家を訪問する。ところがそこは荒れ放題で、マナセと妻のサリマは見るも無残にやせ細っている。そして団らんの最中、異常に大きな頭をした幼い子どもが家に入ってくるのを見て驚いたカジモトにマナセは、自分がピリという名の女性から治すことのできない性病をうつされ、それが妻、そして子どもへと感染したことを打ち明ける。それを聞いたカジモトの妻サビナは気を失う。サビナの流産の原因は、赤ん坊の頭が大きすぎたことであった。つまりカジモトもピリから同じ病気をうつされており、その病気がサビナの流産の原因であったことが判明するのである。

憔悴して自宅に戻ったカジモトとサビナは、顔を合わせることを恐れてしばしの間黙りこんでいる。窓から外を見ていたカジモトは、近所の家の幼い子どもが歩く練習をしている姿を目撃する。彼は妻を振り返り、「妻をかわいそうに思う」（Kezilahabi 2008: 194 ）[2)]。そして夫婦間で以下の会話がなされる。

> 「ぼくには生きる意味がわからないよ。」
> 「あなたのばからしい質問にはうんざり」と彼女は言った。
> 「あなたは他の人みたいに生きられないの？　あなたは何者なの？」
> 「ぼくにはわからないよ」とぼくは言った。
> 「本当にあなたがこんなふうに kichwamaji だとは思わなかった！　思ってもみなかった！」
> 彼女はすすり泣き、涙がその眼から流れた。すぐに彼女の眼は真っ赤になった。そしてそのまま寝に行ってしまった。（Kezikahabi 2008: 194-195）

“kichwamaji”という語が登場するのは、後にも先にもこの場面だけである。このような使用頻度の低さは、先行研究におけるタイトルの英訳の揺れの原因となってきた。

---

2) 以下、スワヒリ語の本文からの訳はすべて筆者による。

Diegner（2002）は“Wrongheaded”（頑固者）、Sakkos（2008）は“Empty-head”（愚か者）、Bertoncini（2009）は“Empty-head”あるいは“Misfit”（不適応者）とし、Wamitila（1999）は“Idiot”（ばか）としている一方で、Rettová は文字通り「水頭症」を表す “Hydrocephalus”や“Waterhead”という英訳を主張している [3]。この作品とカミュの『異邦人』とを比較している Řehák（2007）も、“Hydrocephalus”という訳を採用している。

以上の英訳から、タイトルの解釈として二種類の立場があることが見て取れる。より字義的な訳（kichwa=頭、maji=水）である「水頭症」とする立場と、慣用的な訳である「ばか」に類する語を用いる立場である。いずれの訳も辞書に見つけることができるが、慣用的な訳の方が複数の辞書に記載されているため一般的なようである [4]。タイトルの“kichwamaji”についての立場の対立を確認したところで、次に考えなければならないのは、本文における“kichwamaji”の意味についてであろう。

サビナがカジモトに対して投げかけた、「あなたがこんなふうに kichwamaji だったとは思わなかった」という文脈からは、「ばか」や「愚か」といった慣用的な解釈が適当であると感じられる。しかしこの語をそれほど単純に片づけてしまうことはできない。マナセの子の頭が異様に大きいという描写と、カジモトの子の頭が通常より大きかったせいで死産となったという記述から、本文の“kichwamaji”には「水頭症」の意味が込められていると考えるのが自然だろう。

頭が異常に大きくなるという症状は確かに水頭症の特徴である。T. S. エリオットの作品に登場する水頭症の子どもの描写について論じた森田（2006: 114-115）によると、水頭症とは本来体内に流れてゆくべき体液が頭蓋の内側にたまる病気で、子どもの場合頭の骨が柔らかいために、たまった水に押されて骨が膨張し頭が大きくなるという。この病気は実際にアフリカにおいても珍しくはない。ウガンダで水頭症の患者を扱った経験を持つボストン小児病院の神経外科医のベンジャミン・ワーフは、東アフリカでは毎年 6000 人の水頭症を患う子どもが生まれていると推定している（参考ウェブサイト 1）。それでは、本文における水頭症の意味をもう少し深く考察してみよう。

---

[3] Rettová, Alena. 2007. *Afrophone Philosophies: Reality and Challenge*. Prague: Zdenek Susa Stredokluky. Sakkos. 2008.より引用。筆者は原典には当たっていない。

[4] 慣用的な訳について参考にした辞書については本論の 4.1 を参照。確認できた辞書の内、“kichwamaji”を「水頭症」という意味で載せているのは、英語-スワヒリ語対訳の『薬学辞典』（Mwita 2003）のみ。ここでは、見出し語“hydrocephalus”のスワヒリ語対訳として、“kichwamaji”が見られる。

2.2 病名として —推定できる病気—

本文で実際に“kichwamaji”と呼ばれるのは、大きな頭をしたマナセの子やカジモトの死んだ子ではなく、カジモト自身である。では、カジモトも水頭症だったと言えるのだろうか。ここで、カジモトとマナセがピリからうつされた病気とは、具体的に何だったのかという疑問が生じてくる。

マナセによるカジモトへの説明などからわかるこの病気の特徴とは、性感染症であること（Kezilahabi 2008: 191-192）、著しく痩せること（同: 154, 183）、血液の中に入ること（同: 192）、潜伏期間が 14 年かそれ以上であること（同: 192）、母子感染すること（同: 191-192）、そして治療の困難なこと（同: 154, 192）である。作中では病名は明らかにされていないが、これらの特徴からすぐに思い浮かぶのはエイズであろう。しかし作品が出版されたのは 1974 年であり、エイズがはじめて公的に認知された 1981 年よりも前のことである（ケテル 1996: 390）。

性感染症であり、子どもに先天性水頭症を引き起こすという点から判断すれば、梅毒という病名が浮かび上がってくる。森田（2006: 114-115）も、梅毒の治療が確立していなかった世紀末の英米においては、水頭症は先天性の梅毒の子どもに見られる症状の一つとして医学的に認識されており、その当時の文学においても水頭症の子どもは梅毒を象徴していたと論じている。妊婦が梅毒に感染している場合、約 30%の確率で死産に至り、さらに生まれた子どもの 30%は奇形や発達の遅れや発作等を引き起こす先天性の梅毒を患うとされ（Kleutsch 2009: 1）、水頭症も奇形の一部であると考えられる。

サブサハラアフリカでは、死産の原因の 3 分の 1 が梅毒に関連しており、タンザニアにおいては、2003 年から 2004 年にかけて、梅毒に感染している妊婦の割合は 6.7%であった（Kleutsch 2009: 1）。いずれのデータも 21 世紀に入ってからのもので、作品の書かれた 1970 年代における正確な状況はわからない。しかしスワヒリ語は梅毒を表す語を少なくとも 3 つもっており [5)]、古くから決して珍しくない病気であったことがわかる。1970 年代のタンザニアにおいて、梅毒に感染している母体から生まれた子どもが水頭症を患う可能性があることが認知されていたとしても不思議ではないだろう。

しかしながら梅毒の潜伏期間は標準で 3 週間であり、長くても 3 か月で初期症状である下疳が発症するという（ケテル 1996: 367）。作中でマナセは 14 年という具体的な

[5)] Johnson（1939）によると、“kaswende”、“sekeneko”（動詞形“sekeneka”）、“tego”がある。

数字を示しており、その長さが重要な特徴として認識されていることを無視できない。

ここでもう一度エイズという可能性を確かめてみたい。1981 年にはじめて報告された後、1982 年にはヨーロッパの複数の国々において赤道アフリカ地域生まれの人々の間に同じ症例が報告されたことから、エイズはアフリカの中央部起源であるという推測がなされ、直後の調査によってこの推測は裏付けられた（ケテル 1996: 391）。このことは、80 年代初頭に欧米各国において確認される以前からアフリカにエイズが存在していたことを示唆している。事実アフリカでは、1950 年代からコンゴ川上流の村々で HIV 感染が散発的に起きていたと見られており、1970 年代にはコンゴ川下流の都市部やヴィクトリア湖周辺で、カポジ肉腫や髄膜炎といった、現在ではエイズの典型症状として知られる病が流行した（大池 2013: 13）。1970 年代に書かれた作品に、「数年後エイズと名付けられる性病」が描かれていたとしても不思議ではないのである。

ジンバブウェにおけるエイズの受容の歴史を追った Mbona（2012）によると、ジンバブウェの多数民族であるショナ人の間には、“runyoka”と呼ばれる性感染症が伝統的に存在し、80 年代にエイズの知識が広まった後も、エイズは“runyoka”の一部であると考えられていた。“runyoka”は他人の妻と性的関係をもった男性がかかる病気とされ、その原因は正式な夫による呪術行為であると信じられてきた（Mbona 2012: 3）。ジンバブウェの事例を使ってタンザニアのウケレウェの状況を推測するのは無理があるかもしれないが、作品の書かれた 1970 年代のウケレウェ社会にも Mbona によって報告されたような文脈を付与された病気が存在していても不思議ではない。作中において、実際に性病に感染するカジモトとマナセは双方とも、婚約後に妻以外の女性と性的関係を結んでいた。このような設定は、性病への感染が二人の不節操への罰であるという解釈をたやすく導くものであり、ジンバブウェにおける“runyoka”の位置づけと類似する点がある。

以上の事柄を総合して考察すると、作者は梅毒と「数年後エイズと名付けられる性病」とを混同したと考えるのが最も無難であろう。子どもに先天性水頭症を引き起こすという梅毒は、アフリカでも広く影響力を持ち続けている。そして「数年後エイズと名付けられる性病」についても、執筆時に何らかのローカルな位置づけですでに存在していたと予想できる。現在の科学的な分類を用いて検討すると、作品に描かれたような「症状」は、梅毒とエイズの双方の特徴を有しており矛盾したものである。しかしエイズが報告される前である 1970 年代には、二つの病気はどちらも性感染症であ

ることから、作者がこれらの病を混同するということは十分考えられ、またその描写は読者に特に疑問を抱かせるようなものではなかっただろう。

以上の考察が正しければ、本作はエイズが報告される前にエイズについて扱った作品となる。またこの事実は、ある病気は、西洋諸国で感染者が出たときにしか、注目されることも名前を付けられることもないという、この世界の構造をも示唆することになるだろう。

3. カジモトの個性

本文に現れる“kichwamaji”という語の解釈として最もわかりやすい直接的なものは、「ばか」や「愚か」という慣用的な意味である。この解釈の妥当性を検討するには、この語を投げかけられるカジモトという人物の個性を観察する必要があるだろう。

3.1「アフリカのインテリ」

ダルエスサラーム大学で教鞭を取るムロコジは、Diegner が行ったインタビューにおいて、カジモトという人物について以下のように表現している。

> 「アフリカのインテリは Kichwamaji である。彼は信仰や言語、習慣などあらゆるものを外から取り入れたせいで頭の中をかき乱されている。彼は外のことがらに甚だしくおぼれてしまっている。気が狂うほどに。それで（ケジラハビは）彼を Kichwamaji と呼ぶのだ。」（Diegner 2002: 62）

ここでムロコジは、“kichwamaji”という語を完全に慣用的な意味で用いている。ムロコジにとって“kichwamaji”とは、「外」、すなわち「西洋」の価値観を盲目的に信仰するあまり正常なものの見方ができなくなった様子を意味し、カジモトをそのような精神状態を共有する「アフリカのインテリ」の一人であると見なしているのである。

ムロコジへのインタビューを行った Diegner は、カジモトを「一方で大学教育と現代的な考え、一方でキリスト教と文化的伝統に挟まれ、その間で引き裂かれる若いタンザニア人」と表現している（Diegner 2002: 62）。先行研究では、カジモトを現代と伝統、あるいは都市と村の狭間で揺れる「アフリカのインテリ」とするとらえ方が一般的であった。Řehák（2007: 141-146）は作品に「西洋文化の影響を受けた「都市文化」

を吸収」し、「大学教育を受けた」カジモトと、「東アフリカ本土における伝統的あるいはキリスト教的アニミズム社会[6)]」との対立を読み取っている。Sakkos（2008: 55）は、作品が「西洋的教育を受けたインテリがみずからの拠り所である文化から疎外される」様子を描いていると論じる。Bertoncini（2009: 96）も「西洋文化を吸収しすぎたせいで、みずからの伝統的な村における価値を認識することができなくなった若いアフリカ人の感じる疎外感」が見事に描かれているとして評価する。

この作品を「現代的都市社会」と「伝統的村社会」の対立に引き裂かれた「アフリカのインテリ」の悲劇とする説明は、確かに非常にわかりやすく魅力的である。むしろ、あまりにわかりやすいがために、このような説明を受け入れることには慎重にならざるを得ない。本当にこのような認識は妥当なのだろうか。

3.2 カジモトは特別か

先行研究では、作品からカジモトの村社会からの疎外を読み取ったものが多かった。しかしカジモトや周囲の人々の言動を追っていると、先行研究における通説とは裏腹に、彼が決して故郷の村において疎外され続けていたわけではないことに気づく。たとえばカジモトは、呪術を信じる村人を軽蔑する一方で、嫌がらせを受け続けている故郷の実家を呪術師から守るため、呪術師の弱点を村人たちの前で得意気に話し、みずから率先してその退治に取り組む。

> 「呪術師を捕まえるのは簡単なことだ」とぼくは話し出した。「呪術師の特徴の一つは、やつらは動物のように鼻がよく利くということだ。やつらは人間のにおいをすぐにかぎつける。人間は火にあたるから特別のにおいがするのだ。呪術師が夜に歩き回りたいと思ったら、その呪術師は 4、5 日の間は火にあたらないようにする。そして、草むらに寝かせて朝露で人のにおいを消した特別な服を着て外に出るのだ。裸で出て行くやつらもいる。だからやつらが歩いているのを見るのは難しいのだ。やつらの姿を見たければ、やつらと同じようにするしかない。」（Kezilahabi 2008: 39）

---

6) キリスト教を信仰していながら、呪術の存在も広く信じられている社会のことを示していると考えられる。

さらにカジモトは故郷に滞在している間、村人たちと入り乱れるように女遊びを楽しむ。彼は村で靴の修繕の仕事をしている 15 歳の弟カリアを遣って女性と手紙のやり取りをする。そして結婚の決まっている幼なじみブミリアとひそかに性的関係をもち、それがブミリアの母親に知られて激しく罵られる。また隣のサク村では、自分と同じ年頃の子どもを持つシングルマザーのニャンブソと性的関係を持ち、「ぼくの子どもを産んでおくれ」（Kezilahabi 2008: 60）などとうそぶく。挙句、弟に女遊びを覚えこませてしまう。この弟、カリアはその後ブミリアの母親でありシングルマザーでもあるテゲメアと性的関係を持ったのち、遊びまわる兄をうらやんでとうとうレイプ事件を起こし、最後には殺されてしまう。その頃になってやっとカジモトは、自分の行いがカリアの人生を狂わせてしまったと悟り反省するのである。以上のように、カジモトの人生は故郷の村人たちと密接に関係し、相互に影響を及ぼし合う。カジモトの感情は村人たちの動向に大きく左右され、またカジモトも周囲の人々の激しい愛憎の対象になる。

実際に、村人たちはカジモトが期待するほどには彼を特別扱いしようとはしない。彼らは、最初こそ物珍しさからカジモトに興味を持って大学での事などを尋ねるが、すぐに飽きてしまいそれ以降は彼を特に意識しようとはしない。村の女性たちは何の気兼ねもなく無遠慮に彼をからかい、彼の恋愛の行方に口を出す。幼なじみのカマタが住むサク村で開かれたバナナ酒の祭りに招かれた時の出来事が象徴的である。サク村の老人たちが、何でも知っているであろう教育を受けたカジモトに、日ごろ疑問に思っていることを尋ねる場面である。その内容とは、独立後も彼らが貧困に苦しみ続けている理由と、月が昇ったときには小さいのに沈む寸前は大きく赤くなる理由を問うものだった。この二つの問いにカジモトは十分に答えられず、老人たちの尊敬を勝ち取るのに失敗する。「彼らはもはや自分たちとぼくとの間に大きな違いを見なかった」（Kezilahabi 2008: 51）という一文が示すように、特別扱いへのカジモトの期待は裏切られるのである。

3.3 語り手カジモトの願望

作中では、カジモトの疎外感、孤独感が確かに強調されている。しかしここで注意すべきなのは、語り手がカジモト自身であるということである。すなわちその語りは最初から村人への偏見や自尊心を含んだ極めて主観的なものなのである。このことに

注意してカジモトの語りを観察すると、その語りからは、みずからをまさに先行研究において論じられてきたような人間、すなわち「伝統的村社会から疎外されるインテリ」に見せたいというカジモトの願望を読み取ることができる。

幼なじみカマタの住むサク村に遊びに行き、帰って来てから、行先を告げずに黙って家を留守にしたことを両親たちにひどく叱られた後、カジモトは以下のように考える。「二日の間、カマタの家でぼくは自分の頭を休めていられた。今やまた問題が生じてきた。ぼくが休暇に家に帰ってきたのは、勉強で疲れきった頭を休めるためだったのに」（Kezilahabi 2008: 67）。カジモトは、村は高度な教育を受ける自分にとって息抜きのための場でしかないと語るのである。このような目線が最も顕著に現れるのが、サク村で仕事をしている漁師の若者たちをそばで眺める場面である。浜辺で漁師たちの会話を聞きつつカジモトは、自分の生き方や将来について以下のように思いを馳せる。

> なんでぼくは大学に進んだのだろうという疑問が、そのときふとわき上がってきた。なんでぼくはあんな昔の本―聖書なんかを勉強しようと思ったんだろうか。ぼくは、4 年生のときに脱落していった目の前のこの若者たちに、嫉妬のようなものを感じた。ゼゼをかき鳴らし、笑いさざめき楽しんでいる彼らに。一方ぼくは日々本を読み、時代についていこうと新聞に目を通す。結局のところ教育は、ぼくの純粋な喜びに浴びせられる冷水でしかなかったのだ。いつの間にかぼくの人生と彼らの人生の間には、深い溝が開いていた。大学をやめて彼らのように生きようか、という考えが浮かんだ。何を後悔することがある？　より重い責任を背負い、そうかと言って死ぬ時は同じように惨めで、死後の行き先はと言えばぼくは地獄、彼らは天国。いったいどんな利益があるんだ？　（Kezilahabi 2008: 43）

カジモトは、目の前の漁師たちが楽しく愉快に人生を謳歌していることを疑わず、彼らにもまたそれぞれの悩みがあるであろうことにまったく気づかない。自分が日々口にしているのは、彼らが一日中労働した結果生み出された農作物や魚であり、彼らが自分の代わりに労働してくれるからこそ、自分はその間本を読み、新聞をめくっていられるのだということを、カジモトは一切考えようとしない。この場面に、「村社会

から疎外されたインテリ」を読み取る者は、語り手カジモトの罠にかかっている。この場面から読み取れるのは、カジモトの欺瞞だけであろう。

この直前にカジモトは、漁師たちが罵り言葉を平気で使い、女の話を恥ずかしげもなく披露し合うのを聞いて、「この人たちは罪というものについて、はたして聞いたことがあるのだろうか」と自問する（Kezilahabi 2008: 42）。この疑問は、漁師たちを道徳観など一切もたないごろつき呼ばわりしているという意味で、差別的である。しかし上記の引用において見られる「ぼくは地獄、彼らは天国」という表現と合わせて考えると、カジモトは神を疑い羞恥心を知った「迷える子羊」の状態にあるのに対し、漁師たちは「楽園追放」以前の罪を知らない無垢な状態にあることを暗に示しているとも考えられるだろう。いずれにしても、みずからを教養があるがゆえに悩みも多いインテリと位置づけ、粗野で無学だが人生を無邪気に楽しめる村人たちから差別化したいカジモトの願望がここから見出せる。それは、みずからの苦労を「アフリカのインテリ」が等しく感じる普遍的な苦悩に見せたいカジモトという一個人の願望である。先行研究において提示されてきた、「村と都市との間で引き裂かれる」カジモト像は、語り手カジモトによって巧妙に創り出された幻想の自己像でしかなかったのである。

4. カジモトと“kichwamaji”

前章では、「都市と村」あるいは「現代と伝統」という幻想の二項対立を創り出し、みずからをその狭間で引き裂かれるアフリカのインテリとして表象する語り手としてのカジモトの個性を明らかにした。このようなカジモトの個性を踏まえたうえで再度、彼が妻に浴びせられる“kichwamaji”という罵倒語の意味を考察する。

4.1. 慣用的な意味の相対化

“kichwamaji”の慣用的な意味について考察する上で、この語の解釈についてのムロコジの発言を再び取り上げる。ムロコジは、外から取り入れたものに頭の中をかき乱されているがゆえにアフリカのインテリを“kichwamaji”と呼んだ。しかしこれまでのカジモトの言動の観察から、ムロコジの指摘する性質はカジモトが創り出した幻想の自己像にすぎないということが明らかになった。

ムロコジが代表となって編集し、スワヒリ語研究所（TUKI）から出版された辞書『スワヒリ語-英語辞典』（2001）と『標準スワヒリ語辞典』（第二版 2004, 第三版 2013）の

“kichwamaji”の項目には、それぞれ「愚か者」、「頑固者」（TUKI 2001）、そして「知性を十分に持たないために、期待される結果とは反対のことをする人」（TUKI 2004, 2013）と説明されている。知性の欠如に言及したこの説明は、ムロコジによる本作のタイトルの理解に近いものがある。ここで以下の事柄に気づかざるを得ない。すなわち“kichwamaji”という語を記載しているムロコジによる辞書は、どちらもケジラハビによる本作の発表以降に出版されたものであり、したがってそれらの辞書中の“kichwamaji”の語義解説を、本作から独立した解説として信頼することはできないのではないかという疑念である。ムロコジによる辞書はこの語を“kichwa”の慣用的用法としてではなく、独立した見出し語として記載している。一方でかなり早い時期に発表されたJohnson による『スワヒリ語辞典』（1935）と『標準スワヒリ語-英語辞典』（1939）には、この語は見出し語としてはおろか“kichwa”の項目中にも記載されていない。この扱いの変化には、著名なスワヒリ文学作家がこの語をタイトルに据えた作品を発表したという事象が関わっているのではないだろうか。

実際に、筆者が参照した辞書の中で、この語を単独の項目として、あるいは“kichwa”の項目中に含んでいるものはすべて本作の発表以降に出版されたものであった [7)]。最も詳しい語義解説を載せていたのは『完全スワヒリ語辞典』（Salehe 2009）であり、その第一の意味は「正常な知識を持たず意味のないことをする人、頭が混乱している人、頭のおかしい人」であり、第二に「知性がないようなふりをする人」とあった。

参照した辞書のうち、本作の発表以前に出版された辞書が少ないため確かなことは言えないが、この語に対する扱いの変化や、いくつかの辞書に見られる充実した語義解説には、やはり本作が何らかの影響を及ぼしたと考えることができるのではないだろうか。すなわちそれらの辞書中のこの語の語義解説は、そのまま辞書の編者による本作の解釈であるという可能性があるのである。この可能性は読者に、この語の意味についてのより柔軟な考察を許してくれるに違いない。そこで次節では、これらの辞

---

7) ここに、筆者が参照した辞書とその語義解説を年代順にすべて載せておく。『意味と用法の辞書』（Bakhressa 1992）には「頑固者、口うるさい人、強情な人、妨害者」とある。『スワヒリ語辞典』（守野庸雄, 中島久 1993）には、「おまえが kichwa maji であり続けるなら、仕事をクビになるだろう」というスワヒリ語の例文と、その下に“kichwamaji”の部分を「とても頑固」に置き換えたスワヒリ語文が載せられている。『表現の辞書』（King’ei 2007）には、「正常な知性のない頭、狂人」とあり、『表現と意味の辞書』（Wamitila 2008）には、「知性のない頭、ばか」とある。なお、2.1 で述べたように、Wamitila（1999）は本作のタイトルを「ばか」と英訳しており、ここでもみずからが編集した辞書における語義解説と本作のタイトルの解釈との類似が見られる。

書中の語義解説を相対化し、より本作の内容に即したこの語の意味を提案したい。

4.2 “kiburi” について

早い時期に出版された Johnson（1935, 1939）には“kichwamaji”という語が含まれていなかった。しかし『標準スワヒリ語-英語辞典』（Johnson 1939）の“kichwa”「頭」の項目を見ると、6 番目の意味に「強情」や「うぬぼれ」という説明があり、さらに“kichwa”を用いた慣用句が詳細に紹介されている。それによると、「“kichwa”をすること（kufanya kichwa）」や「“kichwa”をもつこと（kuwa na kichwa）」という言い方で「生意気になること」、「強情をはること」、「うぬぼれること」を意味し、「大きな“kichwa”（kichwa kikubwa）」は「大きな頭」、「膨らんだ頭」だけでなく、「うぬぼれ」や「尊大」を、さらに「“kichwa”を持つ人（mwenye kichwa）」は「うぬぼれ屋」を意味するという。このように“kichwa”という語はその一語で「うぬぼれ」という意味を持ちうるのであり、「大きな」あるいは「膨らんだ」という形容が付くことでさらにその意味は強くなる。よって一方で「水頭症」、すなわち「水で膨らんだ大きな頭」という意味を持つ“kichwamaji”という語も、この意味を抱きうると容易に推測できるだろう。

「うぬぼれ」はスワヒリ語で“kiburi”という。『スワヒリ語辞典』（Johnson 1935）においても、“kichwa”の 4 番目の意味として“kiburi”という語が現れている。TUKI（2004）にも、「大きな“kichwa”（kichwa kikubwa）」は“kiburi”を示すとあり、“kichwa”と“kiburi”が結び付けられている [8)]。

“kiburi”という語は、本作中にも登場する。以下は、カジモトがマナセ宅を訪問し、マナセの妻サリマを含む 3 人で談笑する場面である。

> しかしもう一度考えてみると、サリマの言った言葉には確かに真実が含まれており、マナセの最後の質問に答えることができるものであるのに気づいた。

[8)] 本作と同年に出版されたケジラハビの詩集 *Kichomi*（『激痛』1974）に収められている「頭と身体」という詩においても、この二語の結びつきは見られる。この詩は、人民を救済する勇敢な兵士にあこがれるものの道徳的な考えに妨げられている人物が、憎しみによって「頭」を麻痺させることで銃を手に取る様子を描いている。“Lakini kichwa changu kina kiburi mno na kigumu”「しかし私の頭はひどくうぬぼれ屋で尊大だ」（Kezilahabi 1974: 16）という一行に二語の結びつきが観察でき、ケジラハビ自身もこれらの語の関係に自覚的であったことがわかる。さらにこの一行では、ki-という音の繰り返しが詩的効果を高めていると考えられ、ki-という接頭辞を持つ同じ名詞クラスに属するという関係も、この二語の結びつきを強めていることが同時にうかがえる。

マナセに目をやると、彼自身も妻の言葉の中の真実に気がついているようだった。しかしぼくたちの内どちらも、12 年生までの教育しか受けていないような女の発言を繰り返すことはできなかった。ぼくたちにはそれが名誉を失うことのように思えた。「たぶんうぬぼれのせいだ」とぼくは心の中でつぶやいた。「うぬぼれこそが人間のすべてだったのだ。人間は日常のありふれた物事から何かを学びたくはないのだ。」（Kezilahabi 2008: 125 下線筆者）

下線は、原文で“kiburi”が使われている部分である。ダルエスサラーム大学出身のカジモトと、ウガンダのマケレレ大学を出た地方長官のマナセは二人とも、自分より学歴の低い女性の発言の正当性を認めることさえできない。カジモトは自分たちのこの愚かしさを自覚し、“kiburi”「うぬぼれ」という言葉で表している。これまでカジモトの村人たちへの態度や語り口を問題視してきたが、ここではじめて彼はみずからの幻想に気づくのである。カジモトはみずからが、学ぶべき価値ある事柄はすべて大学や本の中にしかなく、学歴の低い村人たちや女性たちなどが織りなす「日常のありふれた物事」から学ぶべきことなど何もないという幻想をかたくなに信じるうぬぼれた人間であることを悟る。

“kichwamaji”と“kiburi”が辞書的な意味の上で関連性を持っているように、本文中のサビナの罵倒語の“kichwamaji”にも「うぬぼれ」の意味が重ねあわされていると解釈できるのではないだろうか。その「うぬぼれ」とはもちろん、幻想を抱くカジモトの性質そのものを意味しているのである。

カジモトは最後までこの“kiburi”を捨てることができなかった。次節ではカジモトの死について見ることになる。

4.3 カジモトの死と “kichwamaji” の二つの意味

最終章でカジモトは自殺するに至る。Řehák（2007: 149）は彼が自殺を選んだ理由について、運命を重視するというアフリカ社会に生きるカジモトは、みずからが悪運に憑りつかれていることを信じ、絶望したという推測をしている。しかし本論ではカジモトの自殺の原因を探ることはせず、彼の死の前後の描写に関して不自然な点を指摘し、論じてきた“kichwamaji”という語の意味に、指摘された点の説明を求めるだけにとどめたい。

2.1 で詳しく述べたように、13 章でカジモトと妻サビナは、自分たちが治療困難な病にかかっていることを悟る。自宅に帰ってきた二人は、顔を合わせることを恐れてしばしの間黙りこむ。そして夫婦間で問題の会話がなされる。サビナの「あなたは何者なの？」という問いかけにカジモトが答えられないでいると、サビナは、「あなたは kichwamaji だ」と自分の問いにみずから答えを出す。この後にカジモトが衝動的に[9]自殺していることから、サビナによるこの捨て台詞が彼にとっていかに重い意味を含んでいたかがわかる。このことをふまえると、カジモトの遺書の内容が不自然であることに気がつく。以下がカジモトの遺書の全文である。

> 私は自殺することにした。汚れた世代を生み続けることはできない。また、私には人間と虫けらや獣との違いがわからない。知性！知性！知性とは何だろうか？　さらに、私は今までの人生において、神を信じるという人に誰一人として出会ったことがない。死を恐れ、地獄に行くのを恐れる人ならば知っている、そんな人はたくさんいるものだ。私の死について、責任を問われるべき人は誰一人いない。死ぬ前に、私は世界に対して告白する。私は自分の子を、直接手を触れることなしに、殺したのだ。（Kezilahabi 2008: 195）

この短い遺書は、書き手の心の乱れをそのまま表すかのようにまとまりがなく、雑然としている。この遺書に「書かれていること」についての議論は、Řehák（2007）などによる過去の研究に任せ、ここでは遺書に「書かれていないこと」について指摘したい。遺書に書かれていないこと、それは妻サビナについてである。自殺の直前まで共に行動しており、思いやりもしたサビナについての直接的な言及が一切見られない。今やサビナも治療困難な病に侵されており、それがすべて自分の不節操に端を発することを承知しておきながら、妻に対する謝罪の言葉はおろか、言及さえしていないのである。ただ、遺書中の「私は今までの人生において、神を信じるという人に誰一人として出会ったことがない」という一文に、敬虔なプロテスタントである妻への当てこすりが読み取れる。さらに、「汚れた世代を生み続けることはできない」という、あ

---

[9] 「ぼくは自分が何をしているのかわからなかった」（Kezilahabi 2008: 195）という表現が見られる。

たかも自己犠牲を装うかのような一文からは、サビナにも自殺を勧めているとさえ読み取れる暴力性を孕んでいる。付け加えられたかのような「私の死について、責任を問われるべき人は誰一人いない」という一文が唯一の救いである。作中ではこの遺書を読んだサビナの心情は語られないが、いずれにしてもこの遺書は彼女をひどく傷つけるものであったことは間違いない。なぜカジモトはサビナに対してこれほど冷酷な遺書を書いたのだろうか。

この問いには、やはり自殺の直前のサビナによる罵倒が絡んでいると考えざるを得ない。自分が何者であるのかわからないというカジモトの問いに対して、サビナは「あなたは“kichwamaji”である」という解答を提供する。カジモトの語りによって描かれたサビナ像からは、サビナがこの罵倒語にどこまでの意味を込めることができたか明らかではないが、少なくともカジモトはこの語から二つの意味—病気とうぬぼれ—を意識させられたことだろう。つまりカジモトはサビナに、自分でもうすうす気がついていた事実を、簡潔で見事な言語使用によって言い当てられてしまうのである。サビナは女性であり自分の妻であるがゆえに、カジモトが“kiburi”「うぬぼれ」を抱く対象にほかならない。そのような相手に図星を突かれるという経験は、彼の“kiburi”の我慢の限界を超えていたのではないだろうか。遺書にサビナへの直接的な言及がないという不自然さに、彼が最後まで捨てることのできなかった“kiburi”を見出すことができるのである。まさにカジモトは、自分が“kichwamaji”であるという事実とともに死んだと言えるだろう。

5. おわりに

カジモトという人物は、都会と村、伝統と現代との間で引き裂かれる「アフリカのインテリ」として一般化されてきた。本論文の目的は、そのような定式化されたカジモト像が、実は語り手カジモト自身によって創り出された幻想の自己像にすぎないことを明らかにすることであった。さらにタイトルであるにもかかわらず作中に一度しか使用されず、その意味も曖昧のままであった“kichwamaji”という語の、本文での意味と役割を明確にすることを目指した。

“kichwamaji”という語は、一般的ではないが「水頭症」という意味を持っている。その一方で、この語の辞書中の解説を相対化し、この罵倒語を浴びせられたカジモトの個性を重視することで、この語から「うぬぼれ」というもう一つの意味を見出すこと

が可能であった。まさにこの多義性こそが物語を生んだのである。カジモトは女性や無学の人々からみずからを差別化したいという願望を抱いている。しかしその願望とは裏腹に、実際にはそのような人々と最も密接に関わり合い、その結果死に至る病に感染し、妻に罵倒されたことで自殺してしまう。“kichwamaji”という語は、結果的に彼を死に追いやることになる、彼の願望に潜む矛盾を見事に一語で言い表しているのである。この矛盾をより効果的に表現するためには、やはり彼を絶望させる病気は性感染症でなければならなかったと言えるだろう。さらにカジモトの生き方の矛盾と死の原因を物語るこの語を、妻のサビナによって言わしめ、その直後にカジモトが自殺するという設定により、作中に一度しか登場しないこの語は、作品全体に影響力を持つキーワードとなり得ている。

カジモトの語りによるカジモト像が彼の幻想の自己像として相対化された今、新たに浮かび上がってくるカジモト像とはどのようなものであるのだろうか。カジモトという主人公の魅力の謎に迫るため、今後は本作に見られるカジモト以外の語りや、作者ケジラハビ自身に着目する必要がある。

参考文献

大池真知子. 2013. 『エイズと文学―アフリカの女たちが書く性、愛、死―』世界思想社.

ケテル，クロード. 1996. 『梅毒の歴史』（寺田光徳訳）藤原書店.

森田由香. 2006. 「T.S.エリオットと性病―『荒地』草稿における「水頭症の幼な子」をめぐって―」工学院大学研究論叢第 43-(2). 107-120.

守野庸雄，中島久 (編) 『スワヒリ語辞典. アジア・アフリカ基礎語彙集シリーズ』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

Bakhressa, Salim K. 1992. *Kamusi ya Maana na Matumizi*. Oxford University Press.

Bertoncini-Zúbková, Elena. 2009. “Contemporary Prose Fiction 2. The Tanzanian Mainland, From the 1960s to the 1980s.” Elena Bertoncini-Zúbková, Mikhail D. Gromov, Said A. M. Khamis, Kyallo Wadi Wamitila. *Outline of Swahili Literature: Prose Fiction and Drama.* pp. 95-96. Brill Academic Publishers.

Diegner, Lutz. 2002. “Allegories in Euphrase Kezilahabi’s Early Novels” *Swahili Forum* IX. 43-74.

_____ 2005. “Intertextuality in the Contemporary Swahili Novel: Euphrase Kezilahabi’s *Nagona* and William E. Mkufya’s *Ziraili na Zilani*.” *Swahili Forum* 12, 25-35.

Johnson, Frederick. 1935. *Kamusi ya Kiswahili*. Oxford University Press.

_____ 1939. *A Standard Swahili-English Dictionary.* Oxford University Press.

Kezilahabi, Euphrase. 1974. *Kichomi*. Heinemann Educational Books (E.A.) Ltd.

_____ 2008. *Kichwamaji*. Nairobi: Vide~Muwa Publishers Limited. 初版 1974 年.

King’ei, Kitula. Ahmed Ndalu. 2007. *Kamusi ya Semi za Kiswahili*. Toleo Jipya. East African Educational Publishers.

Kleutsch, Lauren. 2009. “Rapid Syphilis Tests in Tanzania: A Long Road to Adoption.” Steven A. Harvey, Waverly Rennie. Bill and Melinda Gates Foundation, Center for Human Services.

Mbona, Michael. 2012. “HIV and AIDS: an epidemic of “pandemonium” amid denial and stigma by the Roman Catholic, Anglican and United Methodist Churches in Manicaland, Zimbabwe (1985-2002)”

Mwita, A. M. A. 2003. *Kamusi ya Tiba.* H. J. M. Mwansoko. Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili.

Řehák, Vilém. 2007. “Kazimoto and Meursault: ‘Brothers’ in Despair and Loneliness. Comparing Kezilahabi’s *Kichwamaji* and Camus’ *L’etranger.*” *Swahili Forum* 14, 135-151.

Sakkos, Tiina. 2008. “Existentialism and Feminism in Kezilahabi’s Novel *Kichwamaji*.” *Swahili Forum* 15, 51-61.

Salehe, Mdee James. 2009. *Kamusi Kamili ya Kiswahili.* Adam Shafi, John Gongwe Kiango, Kimani Njogu. Longhorn Publishers Ltd.

TUKI. 2001. *Kamusi ya Kiswahili-Kiingereza.* Toleo la Kwanza. Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili (TUKI), Chuo Kikuu cha Dar es Salaam.

_____ 2004. *Kamusi ya Kiswahili Sanifu*. Toleo la Pili. Oxford University Press and Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili (TUKI).

_____ 2013. *Kamusi ya Kiswahili Sanifu*. Toleo la Tatu. Oxford University Press and Taasisi ya Uchunguzi wa Kiswahili (TUKI).

Wamitila, Kyallo Wadi. 1999. “What’s in a Name: Towards Literary Onomastic in Kiswahili

Literature.” AAP 60, 35-44.

_____ 2008. *Kamusi ya Misemo na Nahau*. Toleo la Pili. Longhorn Publishers Ltd.

参考ウェブサイト

Boston Children’s Hospital’s science and clinical innovation blog “Hydrocephalus: Tackling a global health problem by BENJAMIN WARF on AUGUST 9, 2011” (14.5.25)
http://vectorblog.org/2011/08/hydrocephalus-tackling-a-global-health-problem/